



落田中の一本松の史跡



広々とした逢妻男川付近。
この付近に八橋があった？

な公園があり、そのまん中に、「落田中の一本松」の史跡があります。業平がかきつばたの歌を詠んだとされる場所の史跡です。落田というのは田が崩れて落ちた所といいますが、史跡の位置は宅地造成で動いているようです。

公園の北を左に曲ると、前回も通った鎌倉街道跡とされる道に出ます。この道は古代東海道と想定した道でもあります。左に曲るとすぐ男川の橋です。この付近でしょうか、八橋が架けられたのは。そんな想像をしつつ川を渡ると、少し先から道は台地に取り付き、上りになります。

〈業平の史跡〉

名鉄線の踏み切りの手前左側に、八橋伝説地とされる所があります。小山になった小公園の上には1丈程の小さな石塔があります。これから訪ねる在原寺の縁起では892年頃、業平の分骨を収めた寺とあり、ここに収められたのかもしれませんが。もっとも石塔の建立は鎌倉時代のように、今では案内板には業平供養塔と説明されています。

街道に戻ると線路を越えた向こうに根上り松があります。根の土が流れて露出した後成長したものでしょうか、「値上がり」が株に関



八幡伝説地。
小山の上、石柱に囲まれた中に、小さな墓石がある



根上り松。鎌倉街道に面している

わる人に受けているようです。街道を少し進むと、その在原寺があります。業平の菩提を弔うために、没後に造られたといえます。境内には業平竹や山頭火の句碑等いくつもの史跡があります。緩やかにカーブする街道を進むと、2つ目の信号がこの連載で迎える街道の最終地点になります。道はまだ続きますが、左に無量寿寺へと向かいましょう。

かきつばた園と大書された門を入ります。寺は8世紀初めに慶雲寺として創建されましたが、821年この地に移し無量寿寺としたとあります。これからいけば業平の時代よりも前からあった事になります。境内には杜若が植



業平の菩提を弔うために創建された在原寺



無量寿の裏手の杜若園。一輪咲いているが…

えられ、開花時は多くの人を訪れます。庭を廻ると晩秋にもかかわらず、一輪の杜若の花が咲いていました。寺の裏手に回ると、蛇行して流れる男川が見渡せます。川に出て少し下れば、往きに通った駅前道です。

3 全行程を振り返って

さて、この八橋で古代道連載の旅は終了です。ここで、1年かけて追ってきた名古屋付近の古代東海道全体を振り返って見ましょう。これまでの行程を総括すると次のようになります。まず中心となる駅家です。

(1) 駅家の位置

10世紀の延喜式と和名抄によると、尾張国には、①馬津駅(海部郡)、②新溝駅(愛智郡)、③両村駅(山田郡)がありました。

1番目の馬津駅は、伊勢から尾張に木曾三川を渡った所と考えられ、候補地はその水系に沿っています。上流では、美濃の国の墨俣から、下流は市江(弥富市)までありますが、やはり本命は津島とその隣接部になります。なかでも津島駅の西北の「松川」付近は、もっとも支持の多い地域です。ただ東行するとき再び川(三宅川)を渡るという不合理があり、その川の対岸部の北町付近も併せて考えておく必要があるかもしれません。

2番目の新溝駅は、多くの文献が名古屋台地上の「古渡」付近としています。対案としてあるのは「新溝」という地名のある岩倉市ですが、稲沢市にある国府を通るという意味はあるものの、伊勢から尾張、三河という経路を想定すると北に寄り過ぎているようです。

3番目の両村駅は、従来は二村山付近が主

要な候補地でした。しかし山田郡の郡域問題からもっと北のほうではという意見が出されました。また島田(天白区)での古代陶器の散布地はどうかという意見もあり、少し揺らいでいました。そこに、平成12年、豊明市の「上高根」出土の瓦が古代駅家のものという発見があって一挙に本命になりました(文献②)。

以上のようにみると、尾張の名駅家は概ね次のように想定することが出来ました。

- ・馬津駅：松川(愛西市)付近
- ・新溝駅：古渡(中区)付近
- ・両村駅：上高根(豊明市)付近

(2) 中間の経路 (図2)

①津島～萱津

この区間の多くには条里制の区画が残ります。古代道とされるのは津島上街道ですが、西半分は中世に勝幡城ができて変えられており、条里制の線を西に延長して駅家の松川と結ぶことにしました。そして途中の三本柿などの広幅員の水路跡の道を見つけました。

②萱津の渡

835年の官符にみられる「尾張国草津渡」は五条川と庄内川の合流部でしょう。矢作川、安部川に比べて小さいという人もいますが、両川併せると比肩します。五条川で乗船してやや下り、庄内川の右岸に着けば合理的です。

③萱津～古渡

この区間は、木下良氏が発見した地籍図の帯状の線を辿りましたが(文献①)、3箇所での昔の道が残っていました。道は金山の西にあった元興寺に向かっており、塔が目印ではなかったかと考えました。また露橋で向きを変えた後にも、後世の三間木の水路に沿う道が古道跡ではないかと想定してみました。

④古渡～石仏

前述の木下氏の想定した直線はその区間を越え、精進川の低地を通り過ぎても続いています。途中、中世の城郭造り等で荒らされていますが、石仏付近ではその直線が再び登場しました。石仏には古代寺院が推定されており、古代瓦の窯跡も見つかっています。国分寺への瓦を運んだ道?と想像しました。

⑤石仏～平針

この区間が難問でした。石仏の先は八事丘陵にかかるので、直進か、迂回か、悩みまし

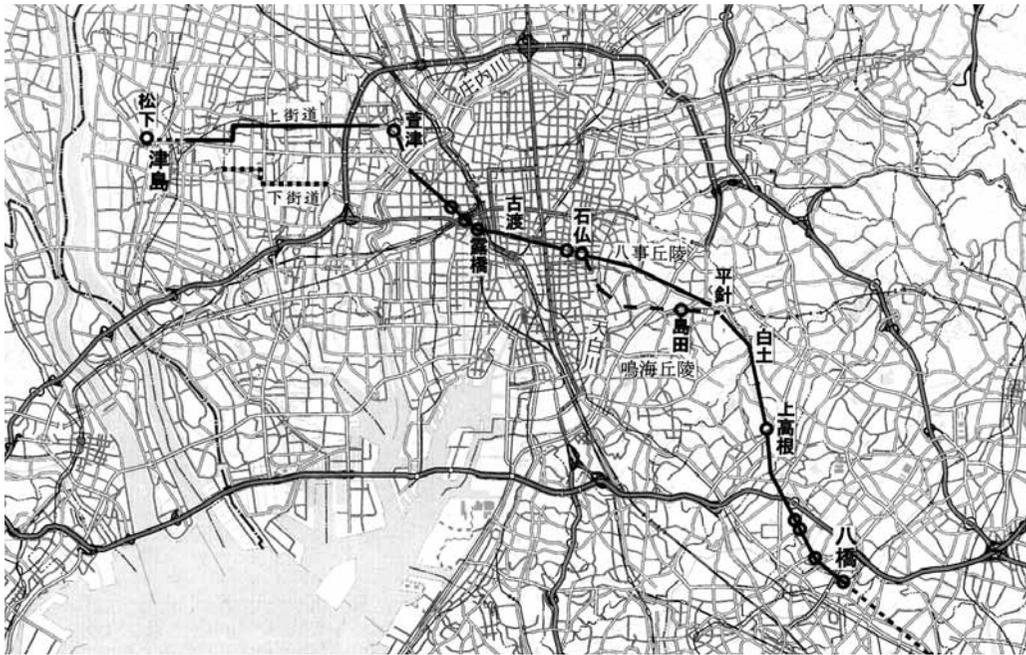


図2 この連載で想定した古代東海道ルート。左の松下から右下の八橋まで、50%近い行程になる

た。直線ルート付近にはそれらしい史跡がなく、一方迂回ルートには万葉のあゆち水や島田の古代陶器散布地等の史跡があり、ここでは迂回して丘陵の山辺の道を歩きました。この区間で、何か手がかりになるものの発見が期待されます。

⑥平針～上高根～八橋

この区間には、島田付近を南に、鳴海丘陵を越えて二村山に出たのではという意見もあります。しかし上高根を目標とするならば、白土の峠を越えた方が合理的です。この峠を越えると上高根、境川、そして碧海台地の八橋へと折れ線ではありますが直線状の道を想定することができました。

ほとんど消えたと思われていた道が各地で発見されたのは、「直線」と「広幅員」という特徴が明らかになったからでした。この連載でも、路を選択することができたのはこのためです。しかし丘陵地帯になると、直進したか、迂回したか、は難しい問題になります。加えてカギになる天白川の低地が、狭い谷間と土砂の堆積で古代の道影を消しているからです。

とまれ、点々と現れては消える古代道路の「幻」を追いかけて、あまり語られることのない古代の名古屋を旅することができました。
(完)

〈主な参考文献〉

- ①『第6回春日井シンポジウム-古代を歩く・旅と道-』(1988)
- ②梶山勝『古代東海道と両村駅』(2000、名古屋博物館紀要)
- ③古代道路研究会編『日本古代道路辞典』(2004、八木書店)

4 古代道路の幻

追いかけた古代道路は千年も前の道です。

連載を終えて

私にとっては無謀ともいえる「古代東海道を追う」一年の旅。力不足で、もう少しというところもあったとは思いますがお許しください。この連載を契機にして「古代の名古屋」に、少しでもロマンや興味を感じていただければ幸いです。
池田誠一

*次回からは「開府・名古屋の町づくり―家康の考えたこと―」を始める予定です。